

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ピウスツキと北方諸民族文化の研究：  
ピウスツキ資料に基づく北サハリンにおける民族関係の研究：  
サハリン・ギリヤークとアムール・ギリヤークー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 史郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00003766">https://doi.org/10.15021/00003766</a>

# ピウスツキ資料に基づく北サハリンにおける 民族関係の研究

—サハリン・ギリヤークとアムール・ギリヤーク—

佐々木 史 郎\*

## 1) 序

サハリン・ギリヤーク（ニグヴン）の調査、研究といえまづシュテルンベルグ Л. Я. Штернберг とクレイノヴィチ Е. А. Крейнович の業績を数え上げなくてはならない。しかし、シュテルンベルグと同じように革命運動に連坐してサハリンに流刑になり、彼の協力のもとに調査を行なったピウスツキ В. Pilsudski の研究も、数は少ないながら、高く評価しなければならないだろう。

ピウスツキのギリヤーク（ニグヴン）研究は、彼がまだ民族学の方法論を十分会得していなかった初期の時代に行なわれたこと、彼が国事犯として行動を束縛されていたこと、調査の姿勢が民族学的研究を主眼とするというよりは、自分がこれまで行なって来た社会改革運動の延長線上にあったことなどのために、学術調査としての一貫性、体系性に欠けている。しかし、彼の初期の論文である『サハリン・ギリヤークの窮状とその救済策』 [“Нужды и потребности сахалинских гилияков” *Записки приамурского отдела ИРГО* т. IV. вып. IV. 1898, Хабаровск] によく表わされているように、その幾分ジャーナリスティックな記述は人々の生活を実にいきいきと我々の前に提示してくれている。

ピウスツキが北サハリンに政治囚として配流されて来たのは1887年8月のことである。以後10年間、1896年に恩赦によって減刑され、南サハリンのコルサコフ（日本名「大泊」）に移されるまで、囚人として北サハリンの開拓に従事させられた。ただ、囚人といっても一定の監視の下にかなり行動の自由があったようで、その間彼は主に東海岸とトゥィミ川流域のギリヤーク達の間で、子供達の教育や様々な福祉活動を行ないながら、彼らの言語、風習に関する資料を集めた。そしてシュテルンベルグに数度にわたって手紙を書き、資料、意見の交換を行なった。

---

\* 国立民族学博物館第一研究部

この10年に及ぶ北サハリンでの調査と経験をもとにして書かれた上記の論文の主眼は、当時のサハリン東海岸のギリヤークの生活の実態を紹介するとともに、サハリンがロシア領として確定して以来年々確実に悪化していく彼らの経済状態をいかに改善していくべきであるかを論じることにあつた。その中で彼はギリヤークの生活改善のために自分が行なった様々な試みの失敗例や成功例を数多く述べている [Пилсудский, 1898: 13, 14, 17-19, 24]。それらの記述は、若い頃のピウスツキが抱いていた社会改革への情熱がいかなるものであつたかを端的に表わしている。

しかし、そうしたピウスツキの主たる意図とは別に、この論文は具体例が豊富に盛り込まれていることから、当時のギリヤークの生活状態を知るための生きた情報を提供してくれる格好の資料ともなっている。本稿ではそれらをもとに、19世紀末期から20世紀初頭にかけての時代の北サハリンにおいて、ピウスツキが当時特に親しく接していた東海岸とトゥイミ川沿岸のギリヤーク（ニグヴン）が周辺の諸民族、とりわけ西海岸とアムール川流域の同胞たちとどのような関係を持ち、いかに接触していたのかを論じることにした。

## 2) 概 観

ギリヤークは周知の通り、アムール川の最下流域とサハリン北部を中心に分布する民族で、自称は、アムールではニヴフ *Nivx*、サハリンではニグヴン *Nigvng* という。その言語は隣族のアイヌやツングース諸族の影響があるとはいえ、全く孤立した言葉で、大きく3つの方言に分けられる。すなわち、アムール方言（アムール川下流域、オホーツク海沿岸、サハリン西海岸にかけて分布）、サハリン東海岸方言（サハリン東海岸とトゥイミ川、ポロナイ川流域に分布）、北サハリン方言（サハリン北端に分布）にである。このうち、アムール方言とサハリン東海岸方言とでは音韻的にも語彙的にも文法的にもかなりの違いがあり、親縁関係にある独立の言語ではないかという考え方も成り立つほどであるという [Панфилов 1968: 431]。

文化的にも若干の違いがあり、大陸やサハリン西海岸のギリヤークは漁撈を主体とする生業体系を持ちながらもツングース系諸族の影響と交易に従事していた関係で毛皮獣狩猟がさかんに行なわれたが、サハリン東海岸では漁撈とともに海獣狩猟が活発で、森林地帯での狩猟はあまりさかんではなかった。両者の違いはまた、そのたどった歴史の違いにもあつた。後で詳述するように、前者は日本と満州を結ぶ交易活動に積極的に参加して外の文化を知り、活力を得ていたが、後者はその主要経路からはず

れていたために時代の波に乗り遅れたようになっていた。したがって、全体的にアムールと西海岸のギリヤークの方が力関係では上にあり、人口もはるかに多かったようである。

ピウスツキが流されていた19世紀末期当時のギリヤークの人口は、1897年の統計では大陸側に50ヶ村2646人、サハリン側に28ヶ村1969人であったとされている（パトカノフ С. К. Патканов の資料による [Смоляк 1975: 24]）。また、シュテルンベルグの記録では1891年にはサハリン西海岸に25ヶ村1041人（家屋数78，世帯数245），東海岸とトゥィミ川流域には25ヶ村703人（家屋数109，世帯数133，家族数169で、このうち海岸沿いに506人，トゥィミ川沿いに197人）であったとある（ここでいう村は冬の集落である）[ШТЕРНБЕРГ 1933: 384-388]。

### 3) 交易による関係

サハリン東海岸のギリヤークとアムール，西海岸のギリヤーク達との関係は古くからかなり密接にあり，経済的，社会的，文化的に互いに大きな影響を与え合ってきた。ピウスツキは，彼が滞在していた当時の両者の関係について次のように述べている。

「ギリヤーク達（サハリン・ギリヤークのこと——筆者註）にとって大きな助けとなるのは，満州の品物を植民地の基金（経済的基金）で取り寄せ，売ってやることである。今それらは若干の者がニコラエフスクで直接買えるだけで，大部分の者は毎年秋にやって来るアムール・ギリヤークから買わなければならない。ニコラエフスクでもその価格は高いかもしれないが，当地の原住民がアムール・ギリヤークから買うときにはその2倍以上も払わねばならない。例えば，綿入りのハラート（アムール・サハリン地域の原住民がよく着る上衣——筆者註）はニコラエフスクでは2～4ルーブルであるのに対して，ここでは4～7ルーブルもする。青色の布（長さ12アルシン）は50コペイカに対して，1ルーブル50コペイカ，フェルト帽は50コペイカに対して，1ルーブルである。

もしこれらの商品をウラジオストークから取り寄せるならば——もっとよいのは中国から直接取り寄せることだが——値段ははるかに安くなるであろう。私がこの基金の店で原住民達が必要としている満州の品物を仕入れる計画を話すと，それを聞いた者は皆このような事業が行なわれる可能性があることに大変喜んでいた。この方法は多くの者がアムール・ギリヤーク達の搾取に対抗するのに大いに役立つはずである。多くの者が認めるところだが，彼らが毎年来ることはサハリンの原住民達にとっては

きわめて有害である。しかし、私自身は、多くのギリヤーク達にしつこく質問されているうちに、彼らのアムールの同胞達の態度には先に述べた悪弊を帳消しにするくらいの良い面があることを確信するに至った。例えば、アムール・ギリヤーク達が、その出現によって毛皮に対する需要を大きくし、その売値をつり上げたのは確かであった。しかしそれだけでなく、彼らはあらゆるテンを、ときたま買いつけに来るだけの現地の商人や官吏達よりも2倍も高い値段で買い取っていくのである。このような状況はやはりアムール・ギリヤークに毛皮を売る方がいいという何人かのロシア人ハンター達によっても確かめられた。その上、彼らはたまにしか来ない買い手達がよくやるように選り好みをするようなことはなく、全部のテンを買っていく。それも宜なるかなで、何となれば、アムール原住民の商人達は毛皮を直接ハバロフスクや中国の企業に売っており、すでに古くから安定した取引関係を持ち、おそらくロシアや特にこの東の辺境で商人達が一般的に受け取るのに慣れている額よりもはるかに少ないもうけで満足しているからである。このことには注意すべきであろう。この他にも、サハリン・ギリヤークが狩に出るための道々の貯えや装備をどうしてもそろえなければならぬのに一文もなくてできない時、必要なお金を狩に出るに先立って用立ててくれるので、アムール・ギリヤークは彼らにとって貴重な存在となっている。毎年秋になるとトウイミ川流域のギリヤーク達はアムール・ギリヤークを救済者として心待ちにしている。というのは、その多くが彼らの助けがなくては狩にも行けないからである。さらにアムール・ギリヤークは、ある場所から他へ移る時やアムールの我家へ帰るときに馭者として雇った原住民に労賃を与えている。彼ら自身は誰もいない川でも既に誰かが使用している川でも猟をするが、既に人が入っている川の場合にはいつもかなりの代償を支払っている。もしこれらすべての事例によってでもアムール・ギリヤークがサハリンの原住民を搾取しているという印象を払拭できないとしても（中には奴隷化されているという人もいるが、私は果してその搾取がロシア人の村から遠い所でも見られるかどうか疑わしく思っている）、いずれにせよアムール・ギリヤーク達のサハリンへの来訪を禁ずることでこの悪に打ち勝つことはできない。というのは、彼らの圧迫から解放した途端、我々は我が原住民達を別のもっと貪欲でもっと情容赦のない商人達の手引きに引き渡すことになるからである。——後略——」 [Пилсудский 1898: 25-26]。

この記述の中で最も重要な点は、まずアムール・ギリヤーク（ニヴフ）がサハリン・ギリヤーク（ニグヴン）にとって経済的に必要不可欠な隣人であったということである。彼らは古くからの交易相手であり、ともに狩し、漁する仲間でもあった。

ギリヤーク達は決して自給自足の経済生活を送っていたわけではなく、鉄や布などの重要な生活必需品や、タバコ、お茶、酒などの嗜好品を毛皮を媒体とした交易で手に入れていた。しかし、北サハリンの東海岸はいわゆる山丹交易と呼ばれるアムール・サハリン地方を經由する日中間の交易活動の経路からはずれていたために、そこに住むギリヤーク達の交易相手はもっぱら西海岸とアムールの同胞達であった。

アムール・ギリヤークが古くより大陸とサハリンを結ぶ交易活動に従事していたことは日本の18世紀末から19世紀初頭の頃の文献が明らかにしている。つまり、山丹交易の名前の元になった「山丹」というのはアムール川下流域のツングース系の少数民族ウリチを指しているが（語源的にはギリヤーク語の *yanta* が周囲の人々によってシャンタに転訛し、それがアイヌ語でサンタンになったという）、実際に商人として大陸から南サハリンまでやって来たものはウリチだけではなく、ナナイ（ゴリド）やアムール・ギリヤークも数多くいたようである。特にアムール・ギリヤークは「スメレングル」の名で中村小市郎、間宮林蔵、松田伝十郎などの残した記録にさかんに登場している。また、1919年にシベリア出兵によってアムール地方が日本に開放されたときに同地を調査した鳥居龍蔵もアムール・ギリヤークの老人達から、彼らが幼い頃には父親達が一年おきに松花江沿岸の三姓（現在の中国黒龍江省依蘭）とサハリンの間を往復して交易を行っていたことを聞いている [鳥居 1924: 294, 303]。

山丹交易の歴史的な推移や意義については既に多くの論考が出ているのでここでは触れないことにするが、上で引用したピウスツキの記述に見られるアムール・ギリヤークの交易活動はこの山丹交易の延長線上にあるため、その原住民にとっての意味をここで若干考察しておこう。

山丹交易のにない手となったのは大陸側ではウリチとアムール・ギリヤークであり、サハリン側ではアイヌ、西海岸ギリヤーク、ウイльта（オロッコ）であった。特にウリチとギリヤークは毎年大陸とサハリンを往復して広く商いを行ない、この交易活動の中心的存在であった。彼らの活動はだいたい次のような具合だった。

彼らはまずアムール川沿いのデレン、モルキなどの集落に設けられた清の出先機関で朝貢と交易を行ない、自分達の居住地やサハリンで仕入れた毛皮や日本製品を中国の品物と交換してアムール下流に帰る。普通はボートで往来するため、川の氷が消える初夏から秋にかけての時期が多いが、冬に氷雪上を犬ヅリで行くこともある。時には遠く松花江を遡って三姓（清の時代にはそのアムール、沿海州地方を支配する拠点であった）まで出向くこともあったため、その往復に何ヶ月もかかることがあり、他の仕事との兼ね合いもあって、多くの場合その年のうちにサハリンに赴くことはでき

なかった。

そして多くはその翌年、満州で手に入れた品物を持ってサハリンに渡り、アイヌ、サハリン・ギリヤーク、ウイльтаらを相手に商売をして毛皮や日本の品物を仕入れて帰った。サハリンでの活動は主に西海岸のギリヤークとアイヌ、ウイльтаらが受け持っていたが、山丹人の中には南端の白主またはその対岸の宗谷（現在の稚内）にあった日本の出先機関で直接幕府または松前藩と交渉を持つ者もいた。

こうした交易のための旅の間、彼らは商売だけをしているのではなく、狩猟漁撈民として道すがらテンやキツネなどの毛皮獣を取って、交易用の品物を補充したり、漁期には川で魚を取って食糧を確保したりもした。特に19世紀にはサハリンは良質のクロテンが取れるので有名であった。

アムール・サハリンの地域でその原住民達を媒介とした交易活動がさかんに行なわれたのは、日本、中国、そして原住民自身の3者ともそこから上がる利益に魅力があったからであることはいうまでもない。特に、当地の原住民達にとっては自分達では作ることができない中国と日本の品物を手に入れることができる。交易の中で彼らが欲しがったものは穀類や豆類などの食糧、絹や木綿の布地、鉄をはじめとする金属類、そして装身具となる玉類であった。そしてその代償として、または貨幣代りに使われたのは圧倒的に毛皮類が多かった。

この地域の商取引の慣習では掛け売り、掛け払いが一般的であった。つまり、商品を先に渡しておいて、その代金または代償物を後で受け取るというやり方である。普通は翌年払いであったが、2年、3年と待つ場合もあった。ただ、この方法では今日のクレジット・カードの場合と同じく、当座に金や毛皮がなくても物を置いていってもらえるため、往々にして負債がたまりがちになった。そして、その担保として婦女子が連れ去られたり、借金取りを恐れて人々が山に逃れ、集落がそっくり消滅することもあり、19世紀の初め頃には重大な社会問題となっていた。このような状況はまた、松前藩がオムシャと称してアイヌ達に強制的に山丹品を供出させていたことによって拍車がかけられていたようでもある。

しかし、考え方によっては山丹人もサハリンの住民を信用していたからこそ掛け売りをしていたともいえるわけで、満州での交易でも彼らは同様の方法で商売をして、きちんと翌年には代金を支払っていたという [洞 1956: 78]。また、アムール・サハリン地域の人々の交易の意図をその立場に立って考えてみてもこのように考えるのは妥当であるといえるだろう。

つまり、当時の彼らの物質文化は中国や日本といった外来の品物がなければ全く成

立しない状況にあり、そのためにも交換、交易は不可欠であった。そして、交渉を成立させるためには相互の信頼関係が最も必要とされ、交換の比率も、支払い方法もこの信頼関係によって決められていたと考えられる。したがって、生活に不要なものでも利潤を追求するために生産、販売し、常に拡大再生産を繰り返さねばならない、資本主義的またはそれに類する企業家や商人の交易とはその性格を全く異にするのである。この山丹人の商慣習に関する問題は、今後は山丹人やサハリン原住民の社会過程の一つとして考察し直す必要がある。

上で引用したピウスツキの記述に見られるアムールとサハリンのギリヤークの交易も本質的にはこれに類したものであったと思われる。ただ、両者の間は海峡を一つ隔てただけで、比較的近かったので、交渉も毎年行なわれたようである。アムールのギリヤーク達がサハリン東海岸やトゥィミ川流域に毎年秋に現れたというのは、恐らく彼らの生業の年間サイクルと密接に関係がある。つまり、夏の漁期が終って、生活に余裕ができてから交易などの活動に入るわけである。また、冬のクロテン猟を資源の豊富なサハリンでやろうという意図もあったかもしれない。

たとえアムール・ギリヤークのサハリン東海岸での商売が搾取と見えることがあったとしても、その本質が山丹人の場合と何ら変わるところがないとすれば、それはやはりヨーロッパ的近代国家の商人達とは全く異なるはずである。恐らくアムール・ギリヤークも重視したのは利益ではなく、お互いの信頼であったと思われる。つまり、翌年必ず支払われることがわかっているからこそ代金後払いで物を売ることができるのである。ピウスツキによれば、アムール・ギリヤークは装備が整えられずに狩に出られない者に金を貸すこともあったようであるが（もちろん、後払いに必要な装備を渡すこともあっただろう）、これも利子を稼ぐというよりは、伝統的な社会慣習に基づく相互扶助の精神によっているというべきであろう。間宮林蔵も『北蝦夷図説』の中で、「此夷諸物貸借をなすこと、朋友昵近の者は云ふに及ばず、遠境隔土の者といへども忌憚することなし」と述べて [間宮 1972: 361]、ギリヤークの間には伝統的に物の貸借があったことを示唆している。

また、アムール・ギリヤーク達がロシア商人よりも2倍も高い値段でテンの毛皮を買い取っていたということも、彼らが山丹交易の長い伝統に培われてきた相場や慣習を遵守していたためと思われる。

しかし、19世紀末期になってロシア人を初めとする外来者が多数移住して来るようになると、その信頼を守ろうにも守れない状況になってしまった。サハリン東海岸の住民達の中に交換の代償となるべき毛皮などを十分用意できない者が現れたり、アム

ール・ギリヤークの方でもロシア人とのつきあいから利益優先の風潮を身につけてしまった者もいたであろう。ロシアからの影響は物質文化だけでなく、社会慣習や精神文化にも及んでいたはずである。しかし、徐々にサハリン・ギリヤークにとっては悪になりつつあるとはいえ、当時のアムール・ギリヤーク達は、ピウスツキのいうように、貪欲なロシアの商人に対する最後の防壁であったのかもしれない。

#### 4) 漁場猟場をめぐる関係

アムール・ギリヤークとサハリン・ギリヤークとの関係は交易だけに留まらない。他にも漁撈や狩猟活動での協力関係や、姻戚関係なども重要である。これは他の諸民族（例えばウイльта、アイヌ、ウリチなど）との関係でも同様である。このうち、生業活動に伴う関係について若干触れておこう（姻戚関係についてはピウスツキがほとんど触れていないので、本稿でもひとまず触れないでおくことにする）。

ピウスツキのこの問題に関する資料は断片的なものしかない。しかし、上で引用した部分や彼の他の資料 [Пилсудский 1905, 1907] から判断すると、東海岸ギリヤークと大陸、西海岸のギリヤークとの漁場、猟場をめぐる関係はおおむね良好で、そのための紛争はあまりなかったようである。スモリャーク (A. B. Смоляк) によればそれはアムール・サハリン地域では一般的に見られることで、ここの諸民族の相互関係は伝統的に友好的であり、恒常的な対立、抗争、大規模な紛争は少なかったという [Смоляк 1975]。そして彼女は、そのような状況を支えていたのは漁場、猟場の自由な使用と彼らの客好きの性格であったと主張した [Смоляк 1975: 152]。

ギリヤークの漁場、猟場の領有、使用に関する問題は長い間等閑に附されてきたが、近年、アムール・サハリンの地域を専門とする研究者達も注目するようになってきた。しかし、この地域の専門家でも漁場、猟場をめぐる社会関係を重点的に調査した者がいなかった上に、この問題は非常に複雑な要素を持っているため、確定的な結論を出すのはきわめて難しいようである。実際、現在ソ連を代表する二人のアムール、サハリン研究者、つまりスモリャークとタクサミ (Ч. М. Таксами) が全く反対の意見を述べている。

二人の意見の違いは自ら収集した資料の解釈とその解釈の基礎として彼らが準拠した先人の諸著作の違いに基いている。つまり、タクサミがシュテルンベルグとクレイノヴィチの記述に信頼を置いているのに対して、スモリャークはシュレンクとシュテルンベルグの記述に基いているのである。偉大なギリヤーク研究者だったシュテルン

ベルグを双方とも自分の考え方の基礎に置いているが、これは彼の資料、記述に相反するものが含まれているからである。

両者の意見の違いの根本はギリヤークを始めとするアムール、サハリンの諸民族に漁場や猟場に関して民族的な所有権、占有権、使用権といったものが存在したか否かにある。結論から言えば、基本的に存在し、その残滓が1930年代まで見られたとするのがタクサミであり、毛皮獣の猟場などに個人的な占有があったことは認めるものの、漁場に関しては氏族などによる排他的な所有、占有、使用などはなく、基本的には自由に漁ができたとするのがスモリヤークである。ピウスツキは明言はしていないが、どちらかといえば漁場、猟場に民族的な権利があったとする考えを示唆しているところがある [Пилсудский 1898: 23]。しかし、彼が収集した資料にはそれに矛盾し、異なる氏族、異なる民族に属する者が並んで漁をしていたという記録もある [Пилсудский 1907: 36-37, 39-41]。

ギリヤークの氏族がそれぞれ固有の漁場、猟場を持つという説を初めに出したのはクレイノヴィチであった。シュテルンベルグは毛皮獣のわなを仕掛ける場所に個人的、排他的な権利があり、それが父から子へと相続されていくことがあることは述べているが、彼はそれが永続的であることを疑問視し、さらに漁場に氏族が排他的な権利を持つことを認めることには否定的であった。クレイノヴィチはシュテルンベルグの後を受けたギリヤーク研究者であり、彼もサハリンとアムールを綿密に調査しているが、当時の学風の影響などもあり、上記のような結論に達したと思われる。

1920年代、30年代はシベリア、極東諸民族に関する調査が盛んに行なわれ、数多くの優れた報告書が出された時代であるが、当時の社会組織に関するソ連の理論では、シベリア諸民族では氏族が社会の中心に君臨し、人々の社会生活を全て統括するような考え方が主流であった。そのため、当時の社会組織の記述といえば氏族のことばかりであった。クレイノヴィチと同時代に大陸におけるギリヤークの隣族であるウリチの調査を行ない、優れた民族誌を残したゾロタレフ A. M. Золотарев もやはり当時の学風の影響を蒙り、その社会を氏族中心に描いている [ЗОЛОТАРЕВ 1939]。そして、そのことを明確に言わなかったシュテルンベルグは当時、ギリヤークの氏族の経済的機能に気付かなかったと決めつけられてしまったという [Смоляк 1975: 154]。

タクサミの主張は、基本的にはこのような状況下で生まれたクレイノヴィチらの考え方に依拠している。彼はギリヤークの氏族を経済的機能も持ち合わせた社会集団と考え、固有の財産を持ち、漁撈、狩猟活動の一つの単位であるとする。したがって、その活動の場も当然氏族ごとに所有、管理されていることになる。彼は次のように述

べている。「ニヅヒにとって漁撈と海獣狩猟は最も基本的な生業であった。したがって、このような重要な活動の場はまず氏族の成員達の利用に供せられるものであった」[ТАКСАМИ 1975: 96]。そして、テン猟が行なわれる川の使用权以外には氏族的な漁場、猟場の存在を認めないシュテルンベルグやスモリャークらを批判し、この件に関して最も信頼を置ける資料を残したのはクレイノヴィチであったと主張した [ibid.]。

タクサミが注目したクレイノヴィチの集めた事例は大陸リマン海岸沿いのクリ村(Куль または, Коль) のものであった。この村は同名の川の河口にあり、毎年秋になると大量のサケが産卵のために川をさかのぼって来る。それを取るために村人はボートで産卵場へ出かけるが、川の各部分や支流は全て氏族ごとに分割され、所有されており、さらにその中で家族ごとに場所が決っていたというのである [ibid.]。さらに彼はゾロタレフのアムール川沿岸やリマン海岸の事例、そして、自らアムールやサハリンのギリヤークの村を訪れた時に聞いた古老達の話などから、19世紀末から今世紀初頭にかけての時代の各氏族の漁場、猟場の分布の再現を試み、自分とクレイノヴィチの考え方を補強している [ТАКСАМИ 1975: 96-100]。

このようなタクサミの考えに対し、スモリャークは全く逆の考えを表明している。つまり、クレイノヴィチやゾロタレフが漁場、猟場に対する氏族的所有の存在の証拠として提示した彼らの資料は必ずしも彼ら自身の考えを支持するものではないというのである。

例えば、クレイノヴィチはリマン海岸とサハリンのギリヤークの村落構成を調べて、その結果、特にプイル村(Пуир)の事例について、村を開いた氏族の者ほど前の方を占め、後から移住して来た者ほど後になるということを述べているが、彼の記述を検討し直すと必ずしもそうではなく、先住者も移住者も並んで家を建てているというのである [Смоляк 1975: 154-155]。また、タクサミも例として用いたクリ村の場合も、彼女によれば、そこは小さい村にしてはサケがよく集る産卵場であり、村の住民は自分達の恩恵を誰にも譲りたくなかっただけで、この村は典型的なものではないというのである [Смоляк 1975: 155]。

彼女はクレイノヴィチ、ゾロタレフらの矛盾点を指摘しながら、シュテルンベルグの19世紀末期の資料とシュレンクらの1850年代の資料を用いて、ギリヤークを初めとするアムール川下流域とサハリンの住民には特定の氏族による土地の所有はなく、したがって、居住地や漁場、猟場の占有は伝統的に存在しなかったと主張した [Смоляк 1975: 154-168]。ただし、シュテルンベルグと同様に、個人的な場所の占有とそれが世代を越えて相続されていくことがあることには同意している。特に、冬に魚が集

まりやすい川底や湖底の穴、サケの産卵場などには個人的、排他的な権利が認められていた。中にはそこを使用していた人の名前がそのまま地名になってしまった例も数多くあった。しかし、彼女によればそれがそのまま土地の民族的領有を表わしているのではないという。というのは、この地域では一箇所ですべて恒久的に魚が取れ続けることはありえず、漁師達は転々と場所を変えざるを得ないからである。

アムール川下流域とサハリンにおいて、その原住民達が自分の住居と漁場を転々と変え、土地に対して個人的な占有権の概念を持っていても排他的な所有権の概念はなく、特定の社会集団による土地の線引きがなされなかった理由として、スモリャークはシュレンクの説を発展させて次のように述べている。

まず、シュレンクによれば、ギリヤーク達の自由な漁場の利用は土地の広さに対して人口が極端に少ないことによるだけでなく、アムール川、リマン海岸、サハリンの東西両海岸、そしてトゥィミ川とそれぞれ地域によって、魚の種類、回遊時期が異なっていることにもよるといふ。つまり、その時期に取れる魚を追って漁場を変えていかなければ、冬を越せるだけの食糧が手に入らないためである。そしてスモリャークはこれに加えて、この地域の漁場の不安定性も重要な要因であるという。すなわち、アムール川などは平均3年に1度は洪水を起こし、川底を洗い流してしまうため、漁師達は洪水のたびに新しい漁場を探して動かねばならない。そのような所に何らかの線引きがなされていても、常に破られることになって、意味がないというのである [Смоляк 1975: 158-160]。

比較的個人的な利害が強くかかわる毛皮獣の猟場についても、スモリャークは民族的な領有権を否定している。その根拠として彼女は、ギリヤークにとってまだ毛皮獣狩猟が大きな意味をもっていなかった19世紀には彼らの猟場となる所に異民族が入って猟をしても彼らを不安がらせることはなかったということ、同じ集落に住む帰属民族の異なる者どうしが同じ川に並んでテンのわなを仕掛けることができたというシュテルンベルグの記述、そして、「ギリヤークにおいてはテンのわなを仕掛ける川は集落に所属していたが、個々の家の占有下にあり、世代ごとに継承されていた。そして、その家系が断絶すると、その川は集落の他の成員が占有することができた」というソリャルスキー В. Солярский の記述などを挙げている [Смоляк 1975: 163-164]。また、ツングース諸族が集落からきわめて遠い所まで、長期間かけて猟に出ている事実も、タクサミは彼らのかつての民族的猟場支配のなごりであるとしているが [Таксами 1975: 104]、スモリャークに言わせると、猟場の民族ごとの線引きのないことに由来することになる [Смоляк 1975: 162-163]。

スモリャークは漁場、猟場、居住地の秩序立った使用を支えていたのは氏族的な規制ではなく、その土地へやって来た順番であることを示唆している。彼女は次のように述べている。「当地（アムール川下流域からサハリンにかけての地域——筆者註）のあらゆる原住民に、その場所で活動している人の権利を尊重するという原則が（漁撈、狩猟双方に）存在した。普通、漁にやって来て（基本的には春から秋の漁に限る）他の漁師に出会った者は、先にその場所を占めている者から少し離れた所に網をかける。もしその漁場が小さければ他の場所を見つけなければならない。何人かの者は毎年同じ場所で漁をするが、皆がそれを知っていて誰もその邪魔はしない。というのは、漁場となる場所は他にいくらかでもあるからである」[Смоляк 1975: 161]。

以上のように両者相反する説を紹介したが、先にも述べたように、この問題はギリャークらの社会組織原理にかかわる重大な問題をはらみ、さらに資料解釈の基礎となる理論の違いによって、同じ資料を用いても反対の結論が出てしまうので、簡単にどちらが正しいか結論づけることはできない。そして、両者ともそれぞれの主張の根拠とした資料は信頼のおけるものである。しかし、両者に共通に言えることは、その対象の扱い方が一般的すぎたということである。つまり、この地域では同じ漁撈や狩猟でも季節によってその意味するところは全く違うのであり、その違いによって組織のし方も場所の使い方も全く異なるはずである。彼らはその点をほとんど考慮の入れないで議論を進めている。

より詳しく言えば、漁撈でも春から秋にかけて行なうものと冬の氷上漁では彼らにとっての経済的、社会的意味付けは大きく異なる。つまり、夏を中心に行なわれるものは彼らにとってはその年の冬を越せるかどうか、つまり彼らの存亡がかかるきわめて重要な意味を持ったものである。しかし、冬の漁は漁獲高も低く、夏に貯えた保存食糧の補足的な意味しかない。そしてそのための組織も両者全く異なる。そのような違いのあるものを同列に論じることの意味があるだろうか。

これは狩猟についても同じことで、食糧のための狩猟と毛皮獣狩猟とでは彼らの考え方、態度は異なるはずである。

ここでは紙幅の関係で指摘するだけに留めるが、他の地域で類似の生態系を持つところの事例（例えば北アメリカのオジブワなど [LANDES 1937: 87-126]）をも勘察した場合、次のような事が考えられる。つまり、大勢の人が魚がよく集る所に集中し、冬にそなえて懸命に漁獲を揚げようとする夏の漁場には何らかの恒久的な線引きはなく、逆に資源も少なく、人が比較的分散する冬の氷上漁の場所や、交易に欠かせない冬の毛皮獣狩猟の猟場には個人または特定の社会集団による排他的な占有がなされる

という傾向がある。

このように考えられるのは、もし生態的にシュレンクやスモリャークがというような状況にあるとするならば、冬を越すのに十分な食糧を求めて人々は春から秋の間に各地の漁場や海獣の猟場を転々と移り歩くはずだからである。そのような地域では一時的または定期的に個人や家族またはある出自集団で排他的に使用する区画もできようが、それが何年、何世代にも渡って続く所有地となるとは考えにくい。というのは、洪水などで年々条件が変わるような所に恒久的な「所有地」などを持つことは意味がないからである。また、個人や集落内の特定の親族集団による利己的な行動は経済活動の重要な単位である集落の存続を危うくする恐れもあろう。

それに対して冬の漁場、毛皮獣の猟場は、生活の基盤である冬の集落の周辺にあり、元来、ギリヤークにとっては補足的、個人的活動であるため、個人や家族、親族単位で区画を切ってもかまわなかったと考えられる。ただし、19世紀中期までは毛皮獣の資源に対して狩猟人口が少なかったので、猟場の維持、管理も厳密ではなかったが、資源が減り、ロシアから狩人が大量に流入する19世紀末には各猟場に対する持ち主の権利主張が強くなった。そしてピウスツキが言うように、サハリンでも他人がわなをかけた場所で猟をする時には代償を支払わねばならなくなっている [Пилсудский 1898: 26]。

このように考察を進めて来ると、ギリヤークの主生業である漁撈と海獣狩猟に関してはその活動場所を何らかの社会集団が排他的かつ厳密に区画し、所有ないし占有していたとは考えにくく、その意味でスモリャークの説の方が妥当性が高いといえる。タクサミの説にも一理あり、その具体的な資料も捨てがたいが、それが意味を持つのはより短期的、微視的な視野においてか、または別の、より観念的な領域においてであろう。

夏の漁場、猟場の使用が、先に入った者の権利を尊重するだけで基本的に自由だったということがアムール、サハリンにおける人々の間の全体的な友好的、平和的關係に深く関与している、というスモリャークの考え方は大いにありうと思われる。また、そこに彼らの間に本来的に備わっていた客を歓待する慣習がかかわっている [Смоляк 1975: 152] というのも肯首できる。しかし、これだけでは漁場、猟場をめぐる人々の関係を説明するには不十分である。そこには集落や氏族などの社会集団の形態とその性格、この地域を政治的に支配下に治めた国家との関係が深く関係している。

この問題についてもまた紙幅の関係で指摘するだけに留めるが、この地域の原住民

の集落（彼らの生活の基盤である冬の集落）にはその後背地に十分な生産力がなかったということが重要な要因になっていたと思われる。また、社会単位としてソ連の研究者が重要視している氏族は、この地域に関しては凝集性が低い。というのはその成員が複数の互いに離れた集落に分散して住んでいることが多く、しかも、夏の生業活動は家屋単位、集落単位で行なうのが普通だったからである。

集落の範囲をどのように取るかは問題であるが、アムール・サハリン地域の人々の集落の設定の仕方では一般的に川岸または海岸と森林地帯との境界域に設営されることが多く、したがって、その範囲には家屋の前にある川と後ろの森の一部が含まれることになる。しかし、生態的に上記のシュレンクとスモリャークのいう状況になっていたとするならば、どの集落でもその近くにある川からは冬を越せるだけの漁獲高を揚げることはできず、したがって、春から秋にかけての漁期にわざわざ集落の外へ漁、または海獣狩猟のために出かけなくてはならない。そして、集落付属の川と森は冬の漁場や猟場、柴刈り場として使われることも多いが、その生産物は夏の間貯えたものの補助にしかならない。ということは人々はその食糧の大部分を集落の置かれている土地の外から得なければならぬということになる。

アムール・サハリン地域の諸民族のように定住指向の強い人々が自分の集落の範囲外から必要な食糧の大部分を確保しなければならないような状況では他の集落、他の社会集団と恒常的な対立関係に陥るわけにはいかない。というのは、個人的にも集団としてでもどこかで対立を起こしては使える漁場、猟場が減り、それだけ食糧の確保が難しくなるからである。

そして、規模の大きな戦争や長期の対立関係を維持するにはその単位となる集団に確固たる経済的基盤が必要であるが、この地域では一般的に、集落のような地域集団でも氏族などの出自集団でも戦いの単位となるにはそれがあまりにも脆弱である。つまり、集落はその後背地の生産力が低くて頼りにならず、氏族はその成員が各地に分散していて、全員が一箇所に集合することは不可能である。ただし、どのような関係にせよ、有志の者や篤志家が集まって戦いに必要な基盤を作るならば、それも可能である。しかし、あまり規模の大きいものは無理であったろう。つまり、説話などに登場する紛争などはその程度のもではなかったかと考えられる。

集落が開放的で、外からの移住者を歓迎するのも同じ理由であると考えられる。つまり、集落の範囲内からとれるものは補足的な意味しかなく、集落付属の土地に対する経済的な依存度、執着が低いため、外部の者が住み着くのをこばむ必要がないからである。それどころか、夏の漁場での労働力が増え、また、氏族外婚が遵守される場

合では婚姻関係を結ぶ相手が増えることになり、かえって喜ばしいことになるのである。

ただし、漁場や集落が開放的だったとはいえ、それはあくまでも経済的な側面に関してである。特にクマ祭などの儀礼に際して新参者の参加資格が古くから住み着いた者と同等であったかどうかは、まだ資料の検討が不十分で断言はできないが、疑問である。古い住民の方がその土地との結びつきからいえばはるかに強いため、特に土地の靈魂に関しては何らかの区別があったと思われる。

しかし、個々の事例では例外や差があったにせよ、集落の置かれた場所そのものの生産力が弱かったことが集落の形態と漁場の占有のし方に大きな意味を持っていたことは確かであろう。

ここを支配圏に入れていた国家との関係では、日本と中国の彼らに対する政策が重要な要因になっている。両者とももっぱら朝貢と交易を主としていて、後にここを支配するようになったロシアや明治以後の日本のように大量の移民や商人を送りこんで原住民の生活を攪乱するようなことをしなかった。それどころか清も松前藩、江戸幕府も自国の民がこの地に入るのを厳しく制限し、無用の接触をさせなかった。このような政策は当時のアムール・サハリン原住民についての情報を限られた不完全なものにしたが、逆にそのために彼らの伝統的な社会、文化がよく保たれたともいえよう。

## 5) 結 論

以上、ピウスツキの残した資料をもとにして、サハリン東海岸とトゥイミ川流域のギリヤークとアムール・ギリヤークとの関係を交易と漁場、猟場の使用の面から考察を試みたが、その結果、上記のような条件のもとで成立していた北サハリンの原住民の間の関係は19世紀中期までは比較的良好であり、物質的にもかなり恵まれていたと結論付けることができよう。

ピウスツキによれば、サハリンの東海岸、トゥイミ川流域でも、飢餓はロシア人が植民してくる前は、当時の老人達の父親達が若かったころ、つまり1810年～1820年ころに1度あったきりであったという [Пилсудский 1898: 3-4]。

ロシアからの移民が入り込んで来る前は、海も川も資源が豊富で、誰も当時の秩序や慣習を乱すものがいなかったため、魚も海獣も取り放題であった。森の資源もはるかに豊かで、男達は毎年4～5頭のクマを取り、野生のトナカイが家の近くまでやって来て、格好の獲物になったという。また、コハレブザクラやコケモモなどのベリー

類やユリの根なども無尽蔵にあり、植物性の食糧も十分に貯えることができた。毛皮獣もまだ豊富でそれを取る人も少なかったため、交易に十分な量を取ることができた。そして、こうした豊かな自然の資源を背景にして活発に交易を行なうことができ、穀物、まめ類などの食糧、衣類、鉄製品などを十分手に入れることができたのである [Пилсудский 1898: 5-6]。

しかし、このような恵まれた状態も近代国家の進出によって、乱され、生活状態は悪化の一途をたどることになる。

19世紀後期になってアムール、サハリンに移民して来たロシアからの入植者がやったことは、農地、牧地の開拓と称して森林を伐採して野生の動植物を追い払い、そこに柵をして今まで自由に使っていた原住民達を締め出すことであった。しかも、入植者達はギリヤークの土地を横領しておきながら、彼らが近くに来ることを嫌って、暴力を奮ったり、その家を壊したり、物を盗んだりなどの略奪まがいのことを行なった。また、ギリヤーク達の生活の支えであった漁場も軍隊や、囚人達に占拠されて思うように使えなくなり、ロシアやエヴェンキの狩人らによって、毛皮獣の猟場も荒されてしまった。

しかもロシアからは砂糖、酒などの魅力ある品物がもたらされ、原住民達は次々と新しい物質文化に溺れるようになってしまった。ピウスツキはちょうどこうしてサハリン・ギリヤーク達の生活状態が悪化していく過程を観察していたわけで、彼のサハリン流刑以来10年間の活動の中心は、その生活をいかに近代社会に適応させながら改善していくかにあった。

サハリンの諸民族、すなわち、アイヌ、ウイльта、ギリヤークらがロシアと明治以後の日本という近代国家と接触することによっていかなる影響を受け、生活がどのように変化したのかという問題は非常に重要であり、ピウスツキの資料にもその関係のことが詳しく記述されている。しかし、そのことについては稿を改めて論ずることにしたい。

## 謝 辞

本稿を仕上げるに当っては東京大学教授大林太良先生、相愛大学教授加藤九祚先生、早稲田大学講師伊東一郎氏に草稿段階で目を通していただき、貴重な助言を賜った。また、研究会活動を通じて科研の研究協力者の方々や ICRAP の方々からもいろいろと御教示いただいた。ここに合わせて感謝の意を表したい。

## 文 献

岡本柳之助編

1898 『日魯交渉北海道史稿』東京。

加藤九祚

1986 『北東アジア民族学史の研究』東京：恒文社。

近藤重蔵

1905 「辺要分界図考」国書刊行会編『近藤正斎全集』第1巻，東京：国書刊行会。

白山友正

1933 「山丹交易事情——明治以前の日滿通商関係」『経済史研究』40号，pp. 98-107。

末松保和

1928 『近世に於ける北方問題の進展』東京：至文堂。

高倉新一郎

1939 「近世に於ける樺太を中心とした日滿交易」『北方文化研究報告』No. 1，pp. 163-194。

1942 『アイヌ政策史』東京：日本評論社。

竹内運平

1933 「山丹交易に関する考察」『国学院雑誌』第39巻，5月号，pp. 61-79，6月号，pp. 54-77。

鳥居龍蔵

1924 『人類学及び人種学上より見たる北東亜細亞』東京：岡書院。

洞 富雄

1956 『樺太史研究——唐太と山丹——』東京：新樹社。

中村小市郎

1982 「唐太雑記」高倉新一郎編『犀川会資料全』札幌：北海道出版企画センター，pp. 597-650。

松田伝十郎

1972 「北夷談」大友喜作校訂解説『北夷談・北蝦夷図説・東蝦夷夜話』北門叢書第5冊，東京：国書刊行会 pp. 117-276。

間宮林蔵

1972 「北蝦夷図説」大友喜作校訂解説『北夷談・北蝦夷図説・東蝦夷夜話』北門叢書第5冊，東京：国書刊行会 pp. 277-380。

HAWES, C. H.

1903 *In the Uttermost East*, Harper & Brothers, London & New York.

LANDES, Ruth

1937 *The Ojibwa of Canada*, In Mead, M., ed., *Cooperation and Competition among Primitive Peoples*, McGraw-Hill Book Company, Inc., New York and London, pp. 87-126.

ЗОЛОТАРЕВ, А. М.

1939 *Родовой строй и религия Ульчей*, Дальгис, Хабаровск.

КРЕЙНОВИЧ, Е. А.

1934 Морский промысел гияляков с. Куль, *Советская Этнография*, 1934, No. 5, стр. 78-96.

1973 *Нивхгу*, Москва.

ПАНФИЛОВ, В. З.

1968 Нивхский язык, *Языки народов СССР*, т. 5., (Монгольские, тунгусо-маньчжурские и палеоазитские языки), Ленинград, стр. 408-434.

Пилсудский, Б.

1898 Нужды и потребности Сахалинских гияляков, *Записки приамурского отдела Императорского русского географического общества*. IV, вып. IV, Хабаровск, 1898. стр. 1-38.

- 1905 Письмо командированного о. Сахалин Б. О. Пилсудского, *Известия Русского комитета для изучения Средней и Восточной Азии в историческом, археологическом, лингвистическом и этнографическом отношениях*. No. 2. СПб. стр. 24–30.
- 1907 Отчет Б. О. Пилсудского по командировке к айнам и орокам о. Сахалина в 1903–1905 гг., *Известия Русского комитета для изучения Средней и Восточной Азии в историческом, археологическом, лингвистическом и этнографическом отношениях*. No. 7. СПб. стр. 20–52.
- Смоляк, А. В.
- 1970 "Социальная организация народов нижнего Амура и Сахалина в XIX-начале XX в.", Гурвич, И. С. от. ред., *Общественный строй у народов Северной Сибири*, Москва, стр. 264–299.
- 1975 *Этнические процессы у народов нижнего Амура и Сахалина, середина XIX-начало XX в.*, Москва.
- Таксами, Ч. М.
- 1967 *Нивхи (современное хозяйство, культура и быт)*, Ленинград.
- 1975 *Основные проблемы этнографии и истории нивхов*, Ленинград.
- Шренк, Л.
- 1899 *Об инородцах амурского края*, т. 2. СПб.
- ШТЕРНБЕРГ, Л. Я.
- 1933 *Гиляки, Орочи, Гольды, Негидальцы, Айны, Дальгис и Хабаровск*.